
死物語

黒貂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死物語

【Nコード】

N2068BA

【作者名】

黒貂

【あらすじ】

皆死んだ。

戦場ヶ原も、八九寺も、神原も、千石も、羽川も、火憐ちゃんも、月火ちゃんも、影縫さんも、臥煙さんも、斧乃木ちゃんも、貝木も、忍野も、忍も。
皆、死んだ。

こうなったらさ、もう逃避するしかないよな。
だから、待ってろ皆。

僕もすぐ、そっちに行くから。

001 (前書き)

思い立ったが吉日

と、いう訳で、思い付いた日にパパッと書いて投稿しちゃいました↑

【001】

今から僕の友好関係についての話をしようと思う。

あまりに幼稚で低レベルで、聞くにたえない部分もあるかもしれないが、よかったら聞いて欲しい。

……いや、聞いて欲しいと言ったがそれは嘘だったかもしれない。

これは僕の友好関係を現す話でもあるが、同時に一方的に弄ばれた話でもある。

失敗談と言っても差し障りないかもしれない。

だから正直なところ、聞かれるのは少し恥ずかしかったりもする。でもまあ、こんな僕に興味を持ってくれるのなら、聞いてくれればいいと思う。

弄ばれたとは言え、決して嫌な気分になったりする事はないのだし。

よく間違われるのだが、僕は人付き合いが嫌いな訳ではない。

確かに学校では羽川や戦場ヶ原以外と喋った事は殆どないし、友達は限りなく少ない。

年賀状だって届かないし、ケータイにはほんの少ししか番号が登録されてない。

しかし。

しかしだ。

前述したように、僕は決して人付き合いが嫌いな訳ではない。

苦手と言われれば否定は出来ないかもしれないが、むしろ好きだ。

実は前世が同じなんじゃないかと疑っている、八九寺真宵との絡みを見てくれればそれは十二分に理解してくれると思う。

じゃあ何故今こんなに友達が少ないかと言うと、やはり一番大きいのはレベルの高い学校に入り落ちこぼれ、馴染む機会を失ってしまったからだろう。

しかしそんなのは今からの僕の頑張り次第でなんとでも出来る。

じゃあ何故友達を積極的に作ろうとしないのかと言うと、それは僕が春休みに吸血鬼に襲われた事から由来する。

あれ以来僕は怪異という存在を知り、数々の怪異を見てきた。

怪異を知れば怪異に曳かれる、だそうだ。

そしてそのおかげで僕は、何度も危険な目に遭い何度も皆に迷惑をかけた。

つまり何が言いたいかと言うと、怪異を知ってしまった以上、怪異を知らない人間を巻き込む訳にはいかないのだ。

僕は大変な馬鹿で、誰かが困っていたら見過ごす事は出来ない。

ゆえに僕はもし怪異に困っている人がいたら助けようとする。

それは殆どイコールで皆に迷惑をかけ、心配をさせる。

だから、どうしても僕は自分から積極的に友達を作る気になれない。と、というのが理由の一つだ。

しかし、怪異に関して唯一、そんな配慮を必要としない友人がいる。妖怪変化のオーソリティ。

全国を放浪するアロハのおっさん。

吸血鬼に襲われた僕を助けてくれた、忍野メメだ。

彼は軽薄でチャライが、怪異に関しては誰よりも頼りになり、とても面白い（笑わせてくれるという意味ではない）存在だ。

さて、前置きが例のごとく無駄に長く――え？短いつて？ははは。

元気いいな、なんかいいことあったのか？

忍野メメの決め台詞を借りたところで、いい加減そろそろ始めよう。僕と友人の、シリアスに見せかけた、ただのじゃれ合い話を。

【002】

一番最初は八九寺眞宵だった。

彼女はくらやみに追われていた。

彼女自身が自分からそう望んでそうした訳ではないにしろ、彼女は結果として怪異として嘘をついていた。

そしてそれを知った彼女は、僕達を巻き添えにしてしまう前に、自分から消えて逝った。

次は戦場ヶ原ひたぎだった。

彼女は卒業式の日に殺される予定だった僕を助けるために、たった一人で蛇神と化した千石撫子に立ち向かった。

しかし専門家ではない彼女に何か術がある訳でもなく、あっさり惨殺された。

しかしただ無駄死にをしに行った訳ではなかった。

彼女は貝木から大金を払って聞き出したという呪いで、千石撫子を道連れにする事に成功した。

その次は阿良々木火憐と阿良々木月火だった。

彼女達は正義ごっこで常に敵がいた。

そしてある日、彼女達はその敵に拉致されレイプされ、挙げ句の果てにその様子を撮影されネットに流された。

そして後日、全裸で精液にまみれ、犯し殺された二人の死体が見付かった。

両親はそのせいで心を病み、首吊り自殺した。

その次は神原駿河だった。

彼女は完全に鬱状態だった僕のために、毎日のようにうちに励ましに来てくれた。

しかしある日うちに来る途中、いつものように走っていた彼女は大型トラックに激突され、壁とトラックに挟まれて潰れ死んだ。

遺体は見せてくれなかった。

その次は斧乃木余接と影縫余弦と貝木泥舟と臥煙伊豆湖だった。

彼らはこの連続して僕の周りに死人が出る事に何らかの怪異性を感じたらしい。

だから何が起っているのか探るため、大学時代のメンバー全員で調べる事にした。

しかし忍野メメだけはなかなか見付ける事が出来なかった。

全国を放浪している忍野メメは、文明を嫌うため痕跡が残らないのだ。

しかし万全を期したい臥煙伊豆湖達はあらゆる手を使って探し続けた。

探し続けていたのだが、その探していた全員が死体になって発見された。

全員が死んだ上に、忍野メメの手がかりは掴めず、忍野メメも死んでいる可能性が高いと羽川翼は予想した。

そして、羽川翼。

彼女は今、僕の腕の中にいる。

僕の腕の中で苦しんでいる。

静かに、しかし怒りながら。

「……阿……良々木君……。なんで……。なん……。で……。こんなこと……。した……。の……。……。駄目……。だよ……。……。こんなの……。……。駄目……。だよ……。……。逃

げ…ちゃ…駄目だ…よ…。阿良々木…君…」

それが最後の言葉になった。

彼女は最後まで僕の心配ばかりしてくれた。

自分が僕に殺された事よりも、僕が逃げる事の方が重要なのかよ。

そこは、僕になんで殺したんだって、殺すなんて絶対にしじゃない事だって、怒ってくれるところだろうよ。

「逃げちゃ…駄目だって…？」

…逃げ…ちゃ…駄目だ…よ…。

言われたばかりの言葉を思い出し、何度も反芻する。

「そんなの…そんなの…」

無理だろ。

とは言わなかった。

否、言えなかった。

「僕には無理だ…」

やっぱり言った。

耐え切れなかった。

枯れたと思っていた涙は、羽川が死ぬ前からめどなく溢れ出ている。

…ごめん、羽川。

でも、そんなには苦しくはなかっただろう？

ちゃんと苦しくない方法を調べて、ちゃんと準備をして、ちゃんと実行したんだ。

僕にしては上出来だと思う。

忍野が言ってた通り、お前はなかなか隙がなかったから難しかったけど、ちゃんとやれたぞ、僕。

……安心しろ、羽川。

僕もすぐに、お前達のところにいくから。

すぐにこんな現実を抜け出して、お前達が待っていてくれてるそっちにいくから。

そうして僕はポケットから小さなビンを取り出し、その中に入っている錠剤をありったけ手の平に出す。

毒。

吸血鬼は不死身だが、不死力が尽きればその限りじゃない。毒だって効く。

それでも一般人に比べれば致死量に天と地ほどの差があるが、致死量はある事にはかわりない。

今手の平の上にある毒はほんの数十錠ではあるが、一粒でシロナガスクジラがあっさり死ぬくらいの猛毒だ。

吸血鬼もどきの僕でもきつと殺してくれるだろう。

吸血鬼の死亡原因の九割は自殺で、さらにやり方は太陽に身を晒すという投身自殺らしいが、こっちの方が絶対確実だし楽でいいと思う。

……いや、大抵の吸血鬼は太陽に身を晒したら殆どすぐに蒸発するのか。

伝説となったキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードに噛まれた僕だから、不死力が異常なんだ。

まあ、今は忍に血をやっていないから限りなく人間に近いけど。

そういえば最後に血をやったのはいつだろう。

もうかなり昔のような気がする。

……そっか、最近忍の姿をめっきり見ないと思っていたら、そうだ

ったのか。

彼女もまた、死んでしまったのか。

死んだのだ、旧キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード、忍野忍は。

そうか、また死人が増えたのか。

なに、たった一人増えただけだ。

もう僕は死には慣れたんだ。

こんなの慣れっこだ。

これだけ死んだなら、一人くらい死んだってもう何も思わない。訳がない。

忍と僕は言葉で言い表しづらい複雑な関係だった。

数ヶ月前までは、和解もして、それなりに楽しい日々を送っていたんだ。

何も思わない訳がない。

気付くのが遅れた事が、更に罪悪感を感じさせる。

しかし、だったら早く死ななきゃいけない。

忍が明日死ぬのなら、僕の命は明日まででいい。

忍が今死んでいるのなら、僕は命を一刻も早く捨てなければならない。

そういう、関係なのだ。

：これは、まるで死ぬ事を躊躇している僕のために、お前が背中を押してくれたみたいだな。

最後まで迷惑かけっぱなしで悪い。

ありがとう。

さあ、もう十分に考え事はした。

後悔なんて、ありすぎてしていない。

これで終わり。

これで終わるのだ。

この苦しみから、逃れる事が出来るのだ。

羽川は最後にああ言ったけど、逃避は決して悪い事じゃない。それは羽川が教えてくれた事だ。

だから、羽川。

「僕は逃げる。正々堂々と、胸を張って、ここから逃げる」

そして手の平の小さな山を口に放り込――

「全く、何やってるのさ。阿良々木君」

めなかった。

手をはたかれ、薬を全て落としてしまう。

しかしその声には聞き覚えがあった。

振り向くと

「な…っ……お前…」

そこにいたのは

「はっはー。元気いいねえ、何かいいことでもあったのかい？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2068ba/>

死物語

2012年1月5日05時45分発行